

支配されてると気づいた、 壮絶な子ども時代レポート

こんにちは、中村華子です。

私は25歳だった2006年の4月に起業し、
4か月後に
月商100万円を達成しました。

そして、
起業1年目で、
1,000万円の年収を得ました。

2012年には学研より初出版し、
2013年には2冊目を出版しています。

一見、順風満帆そうに見える人生ですが、
(じっさいは山あり谷ありなんですが(笑))

末っ子が産まれる前に離婚することになり、

現在は7歳、4歳、2歳の子どもと、
4人で暮らしています。

会社は続けるつもりでしたが、
生まれたての末っ子を抱え、
同じペースで働き続けることは難しく、

離婚後、間もなく会社を清算。

現在は、個人事業で、
子育てを優先したのんびりペースで働いています。

きょうは、そんなわたしが

【なんで起業しようと思ったのか？】

その理由と、
そう思うにいたった子ども時代について、

お話ししていこうと思います。

一昔前に比べて、
働く女性はたくさんいますよね。

むしろ、
働いたことない女性って珍しいですよ。

でも、
起業して、
自分で会社を作る女性は
まだまだ少数です。

ふつう、社長って言ったら、
男の人を想像しますよね。

女性経営者は数少ないわけですが、

【オンナ社長】

っていったら、

スーツにハイヒール。

高学歴で、
エリートで、
バリバリのキャリアウーマン。

そんな女性を想像しませんか？

わたしは、
そんな一般的なオンナ社長とは真逆で、

アホ女子高校を中退し、

正社員経験はなく、

資格も特技も貯金も無い、

そんな20歳の時に、起業することを決めました。

その理由は、

『支配されない生き方』がしたかったからです。

目標を達成したいとき、

十分なWHY（理由。なぜ？）があれば、

HOW（方法、やり方）が見つかる。

と言います。

私の中のWHYは、支配されないということでした。

そのためのHOWが、起業だったんです。

中学にも高校にも、
起業した友だちはいません。

それくらい、
私の育った環境において、

起業するというのは
ふつうじゃない、

めずらしい選択肢でした。

でも、
私の中で、
『支配されたくない』という想いは強烈でした。

ぜったい譲れない想いで、

支配されないためなら、
起業しよう。

なんにも知らないけど、
それしかない！

私は、強く、そう決めました。

私にそこまで固い決意をさせたのは、

私の子ども時代の経験が大きく影響しました。

そんな、
私が『支配されたくない』と思う原因を作った、
子ども時代について、
お話しします。

私が覚えている、
いちばん古い記憶の家は、

きんもくせいの木がたくさん植わっていて、
甘い香りを漂わせている家でした。

甘い香りとは対照的に、

家の中は荒れていて、
山積みになったキッチンのコップやお皿には、

よくアリの行列ができていました。

親からの虐待は、
ある日突然始まったものではなく、

物心ついたときには【いつもあるもの】でした。

当たり前の日常のなかに、
親からの暴力がありました。

私は、
実の親から虐待され、
支配されていると感じながら幼少期を過ごしました。

幼いころの記憶を思い出そうとすると、
自分が受けた虐待の記憶が、

驚くほどないんです。

辛い記憶が多いと、
生きていきづらいじゃないですか。

特に親からの虐待は、
自分の存在を否定され続けるのと同じことです。

自己否定、存在価値の否定につながります。

だから、
辛い記憶は脳みその奥底に追いやって、
思い出さないようにする。

心理学では乖離（かいり）と言います。

自分を守るための、一種の自己防衛です。

すみません、それでしたね。
続けます。

私の家族は、
父と母、母の連れ子の姉と兄、私と弟の、6人家族でした。

両親はよく夫婦げんかをしていて、
お互いを罵りあう怒声や、モノが飛びかい、

包丁が出てくることもよくあって、

そんな時はテーブルの下に弟と寄り添って、
怯えていました。

父母はずっと水商売で、
夜は子どもたちだけで過ごしていました。

5歳ころ、
雨の夜に風の音がひどく怖くて、
2歳下の弟と抱き合って眠った記憶があります。

私も弟も、
幼稚園にも保育園にも通わされておらず、

毎日、朝昼兼用のご飯を、
二人で手をつないで、
近くのコンビニに買いに行っていました。

ある日、
父母のお金だか財布だかが見つからないとのことで、

兄弟全員裸にされて、
縛られて、
1日ほど部屋に転がされたことがあります。

連帯責任と言って、
兄弟全員で一晩中正座させられることも、
よくありました。

5歳ころから、正座で夜を明かした記憶があります。

慣れとはすごいもので、
正座したまま眠れるようになるんです。

眠ってるのがばれると、
殴られちゃうんですけど（笑）。

母は口癖のように、

誰が稼いだ金でご飯食べてるんだ！

誰に養ってもらってるんだ！

と繰り返していました。

姉は意地が悪くて、

勝手にお菓子を食べたり、
ものを無くしたことがバレると、

それを兄に押し付けては、
兄がよく殴られていました。

そもそも、
家にあるお菓子を食べて殴られるって、異常ですが。

異常なのが当たり前でした。

親は異常なほど怖く、
特に母の存在は、
恐怖以外の何物でもありませんでした。

でも、子どものころはよそを知らないので、
それが普通だと思っていました。

兄が
初めて、母から包丁で切られたのは、

この家でだった、と後から聞きました。

そんな兄は、
見栄っ張りの父母が飼う犬や猫のペットに、

殺虫剤をかけたたり、
おむすびを食べさせたりして、

いじめていました。

10歳かそこらで
母親から切り付けられる日常を送っていれば、
心がゆがむのも当然です。

虐げられていたストレスを、
ペットをいじめることで発散していたのでしょう。

思い出しても胸が痛いです。

そんな両親が、
私の小学校入学直前に家を買って、引っ越しました。

埼玉県の都会から少し離れた、
小さい庭と、駐車場がある、中古住宅でした。

ここにも、
きんもくせいが植わってありました。

母はどこでもトラブルメーカーで、
引っ越した先でも、もめことを起こしていました。

小さな庭先で犬を飼っていましたが、
誰も面倒をみず、
散歩もしてもらえないため、よく鳴いていました。

ある日、

そのけたたましい鳴き声に、
ご近所さんから苦情を言われたことがありました。

普通なら謝って、
散歩をするようにすることでしょう。

でも、母は謝るところか食って掛かりました。

母に憤慨したご近所さんは、
周り近所を連れ、
大拳をなして抗議に来ました。

テレビのニュースで見る、
外国の暴動みたいな感じです。

自分の家の玄関先に集う、
怒れる大人たちの姿は、

ただただ怖い光景でした。

父と母はよく激しい喧嘩をしていましたが、
父と、
父違いの姉兄も折り合いが悪く、

警察を呼ぶような騒ぎを何度も起こしていました。

発狂した姉が、
家中に灯油をまいたこともありました。

幼い私と弟は、
お水まいてるのかと思っていましたが。

そんな『普通ではない家』は、
ご近所さんから
敬遠されるようになっていきました。

私たち兄妹は、
近所の子どもたちから、

『あの家の子とは遊んじゃだめって言われた』

と言われるようになりました。

自然と、近所に仲のいい友達はいなくなりました。

私は小学生になり、
クラスに友だちが出来ると、

友だちのお母さんやお父さんの優しい姿に、
かなりの衝撃を受けました。

怒られないの・・・
好きなもの買ってもらえるの・・・
家族みんな、いつも笑顔なの・・・

ふつうの子どもは、
親に甘えて、信じて、愛されると知りました。

そんな小学一年生の時、
私は同級生のお誕生日会に誘われました。

そのことを母に告げると、
何を思ったのか、
そのあと間もなく、

私のお誕生日会を開いてくれました。

仲のいいクラスメイト5～6人を招いて、
生まれてはじめてのお誕生日会です。

家はきれいに片づけられ、
見るからに美味しそうなケーキや、
豪華なごちそうと、
たくさんのお菓子やジュース。

普段目にする事のない幸せな我が家の様子が、
嬉しくて、

友だちに誇らしくって、
興奮しました。

箱に入ったくじ引きと
おもちゃやお菓子の景品も用意され、
友だちも大喜びです。

笑顔と笑い声があふれて、
幸せな時間でした。

あっという間に時間が経ちました。

夕方になり、
友だちを見送って振り返ると、

そこには怒りをあらわにした母がいました。

いつもとは違う我が家や、
ごちそうや、
楽しいひと時に、

7歳になったばかりの私は
調子に乗ってしまっていたのかもしれない。

母は、
私の頬を何度も叩いて、
怒鳴りはじめました。

準備に時間とお金がお金ものすごくかかった、

お前はまったく手伝わず、とても疲れた、

お前の友だちのプレゼントは価値のないものばかりだった、

何かしてもらうことが当たり前だと思うな、

お前のせいで嫌な思いしかしなかった、

もう二度と、誕生会などしない。

母に無理をさせてしまったんだ。
私は、なんて悪い子だったんだ。

そう思った私は、
泣いて謝りました。

お母さん、ごめんなさい。
手伝わなくてごめんなさい。
はしゃいでしまって、ごめんなさい。
私が全部片付けるから、
もう何もいらぬから、

許してください。

でも母は、
許してくれませんでした。

私の髪をつかみ、
引きずりまわしました。

何度もけられ、おなかを抱えてうずくまりました。

母は、
背中を丸めてうずくまる私を、
いつまでもけり続けました。

さっきまで笑い声が響いていた幸せな誕生会は、
一転して、

私を殴る母の怒鳴り声と、
私の泣き叫ぶ声だけが響きました。

その後、
私が家に友だちを招くことは、
一度もありませんでした。

引っ越してから、
父母は繁華街でスナックを始めていました。

夜は子どものみで過ごす生活が続きました。

当時、
父母は車でスナックに通っていて、
深夜に帰ってきました。

毎晩、
父母の帰宅を車のエンジン音で察知して、
起きていたことがばれないように兄弟が一斉に眠る、
というのが日常でした。

そんな父母が不在の夜、
今にして思えば、

私は兄に、性的いたづらをされていました。

姉がいない部屋で、
7歳かそこらの私を裸にし、四つん這いにさせて、
お尻に何かを入れられました。

サランラップをまいた棒だよ、
とか言われていましたが、

それは兄の性器だったのかもしれない。

約束を破ったとか、
いけないことをしたとか、

だからおしおきだよ、

と言われていた気がします。

虐げられているストレスを発散するためのはけ口が、
ペットから私になったんだろう、
と今では思います。

当時は小学校低学年ゆえ、
良く意味は分かっていませんでしたが、

なぜかものすごく後ろめたい気持ちで、
誰にも言えませんでした。

そして、

大人になるまで、記憶の奥底に封印していました。

昼間は、
小学校から帰ると、

弟と二人で、
スナックで使うおしぼりをクルクルと畳むのが日課でした。

父は気付くと夜の仕事をしていないときもありました。

その時期は、
毎週日曜日の朝に
父と私と弟で、

泥酔した母をスナックに迎えに行きました。

片付けや支度をする母を待つ間、
スナックのカウンターで、
必ず吉野家の牛丼を食べていました。

週一回のごちそうで、
これほど美味しいものが世の中にあるのか！！とっていました。

そのせいで、
大人になってからも
『吉野家最高』思想が抜けませんでした(笑)。

そんな日々の中、
一番ひどく虐待されていたのは兄でした。

母は機嫌が悪いと、
兄に難癖をつけました。

兄だけ晩ごはん抜きにして、
みんなが食事をとっている横に
正座させたりしていました。

明らかに兄が悪くないことばかりで、
兄がかわいそうでしたが、

母に逆らえる兄弟はいませんでした。

おなかを空かせて、
悲しそうに、
辛そうにしている兄の表情は、

何十年たっても忘れられません。

兄が林間学校や修学旅行の出発当日には、

部屋に閉じ込めたり、
布団でぐるぐる巻きにしたりして、

行かせませんでした。

煙草を持った母が、
泣き叫ぶ裸の兄を追いかけてまわし、
根性焼きするところを、

兄弟全員で正座で見させられたりもしました。

私は、これが辛かった。

私が食事抜きにされて、
兄弟が食事する横で、正座していたこともあります。

髪の毛をつかまれ、
家じゅうを引きずられたこともあります。

寒い真冬の浴室で、
裸にされ、
冷たいシャワーを延々とかけられたこともあります

革のスリッパで、何十回も叩かれたこともあります。

でも、兄を守れなかったこと。
自分の保身を優先してしまったこと。

その記憶は、何よりも辛い記憶です。

幼い子どもが、

大人に、
まして普段から恐ろしい母に、
抵抗することはできません。

でも、思い出すたび、苦しい気持ちになります。

のちに、
15歳から16歳までの2年間で
再び母（と母の再婚相手と弟）と暮らすのですが、

弟をかばって殴られたとき、
精神的にとても楽でした。

姉はてんかん持ちだったため、
折檻されているシーンは見たことがありません。

てんかん、とは、脳の病気です。
人によってさまざまな発作を繰り返し起こすそうです。

きちんと薬を飲んでいると発作は出ないそうですが、

精神的ストレスや体の疲れ、
不規則な薬の服用からか、
何度も姉の発作を目の当たりにしました。

姉の発作は、

突然倒れて、
白目をむいてけいれんし、

泡をふきながら嘔吐します。

幼い私にとって、
その辺のホラー映画よりも、

はるかに恐ろしい光景でした。

弟は末っ子だったからか、
そんなに殴られることはありませんでした。

父母と、兄弟たちとを、
行き来している感じでした。

私にとっては可愛い存在で、
弟が虐待の対象になることが少なかったのは、
かなり救いに感じていました。

でも
兄からすると腹立たしい存在だったようで、
暴力は無いものの、

意地悪を言ったりして、いじめていました。

末っ子のおおらかさで、
弟はそうされても気にする様子はなく、

変わることなく姉兄に甘えていました。

母ばかり虐待している様子が続いていますが、
おもたる虐待者は母でした。

父は止めずに、
傍観していることが多かったですが、

虐待者にまわることもありました。

いつしか母とスナックに行かなくなった父は、

学校の非常勤講師をしていた時期もありました。

そんな父は、
私と弟への勉強の指導を良く行っていました、
なにかにつけて竹刀で叩かれ、

とうてい
小学校低学年の子ども相手とは思えない指導をしていました。

母ほどではないものの、
父もやはり恐ろしい存在でした。

また私と弟が勉強する時間は
姉兄にもテレビを見せず、

父母が不在の時、
姉兄からなじられました。

私が小学3年生のときに
父母が離婚し、

私たちの生活はますます荒んでいきました。

母は毎晩のように、
きらびやかな洋服に身を包み、
スナックへと出かけていきました。

色とりどりの貝が飾られた
美しいワンピースで、
ハイヒールをコツコツ鳴らして出ていく母とは対照的に

部屋の中の干されっぱなしになった洋服には、
ゴキブリが走り回っていました。

部屋中にあるゴキブリホイホイには、
とらえられてしまったネズミが、
悲痛な叫びを上げていました。

私と弟は、
もともと多かった遅刻や忘れ物はさらに増え、

シワだらけで季節感の無い、汚れた服装で、

教室の中でますます浮いた存在になっていました。

誰も髪をとかしてくれず、そんな習慣もなかったから、
私は毎日ぼさぼさの髪で、

通りすがりの知らないおばさんが、
『鳥の巣みたいよ』と
髪をとかしてくれることもありました。

同じころ、
姉がバイト先のお弁当屋の店長と結婚し、
嫁いでいって

母と、兄と、私と弟の生活が始まりました。

ここからの約二年間の生活がまた壮絶で、
あんまり記憶がありません。

基本的には成長し腕力がついて、
母に抵抗できるようになった兄が、

私と弟を守ってくれていました。

そんな兄に、
母が包丁を向けることは日常茶飯ことでした。

クリスマスに、
若干16歳の兄が、
私と弟に、

お菓子の入ったアルミ缶のバッグをプレゼントしてくれました。

16歳で、
父違いの妹と弟を守り、
クリスマスプレゼントまでくれた兄。

その気持ちを思うと捨てられず、
ボロボロになったアルミのバッグは、
今でもとってあります。

どんな食生活だったのか、
まったく覚えていませんが、

水に砂糖をとかして飲んでいた記憶があります。

いわゆる砂糖水です。

子どものごはんや食料が無い家でした。

郊外の一軒家のため家は大きく、
かなり広めの4LDKでした。

父と姉がいたときは、
それぞれの部屋を寝室やリビング、
ダイニングとして使っていましたが、

気付くと玄関わきの
6畳の和室のみで生活するようになっていました。

母は2階の一番奥の部屋を使うようになり、
2階に上がるだけでも緊張しました。

そのころ、
兄に連れられ、
3人で何度も家出しました。

どかんの中で眠っているところを、
お巡りさんに見つかって

連れ戻されたこともありました。

兄が通う近所の高校の部室に忍び込んで、
夜を明かしたこともありました。

家出の時は、
兄が食べ物を持ってきてくれていました。

今にして思えば、

バイトなどしておらず、
もちろんお小遣いなども無かった兄は、

食料を盗んできていたんだろうと思います。

家出の時は小学校を無断欠席していたわけですが、
先生が何かしてくれた記憶は

ありません。

忘れ物が多く、
汚い服装で、

一目で家庭環境の悪さがうかがえる子どもでした。

そのうえ、
無断欠席しがちでも、

先生は知らん顔でした。

殴られるたび、
正座させられるたび、
母の怒号を浴びるたび、

誰か、助けて・・・

とっていました。

誰かが、

私たちを救ってくれるかもしれない・・・

そうして

助けを求めていましたが、

誰も助けてくれませんでした。

母は

反抗するようになった兄に怒り、

兄を勝手に高校退学させてしまいました。

母は、

子どもを所有物のように扱い、

そのすべてを支配するのが当たり前

と、考えているようでした。

この時期、

兄から私への性的虐待が再発しました。

弟が寝付くとはじまる、

兄の性的ないたずらに、

小学校高学年になっていた私は、

これはいけないことなのではないか、

とっていました。

でも、

そう思いつつも、

直接的に拒否したり、

兄にそのことを話したりすることは
ありませんでした。

正確には、出来なかった。

その時
私の身の安全は兄に依存していて、
関係を壊したくなかったように思います。

朝になれば普通の兄妹で、
夜だけ時々、
おかしい状況になる。

これも、
大人になるまで、
思い出すことすらありませんでした。

母からの暴力と、
育児放棄。

兄からの性的虐待。

そんなひどい毎日を変える、事件が起きました。

小学五年生の冬、
母に呼ばれて
2階奥の母の部屋に行きました。

部屋に入ると、
紐をもった母が、

まさに鬼のような形相で、
私をにらみつけました。

心配そうに見つめる、弟のひとみ。

迫りくる恐怖を感じながらも、

こっちへ来なさい、

という言葉に従うことしかできず、

母の持ったひもが私の首を絞めました。

痛い、苦しい。

でも体がしびれたように動かず、
漠然と死を思いました。

ずいぶんと長い時間に思いましたが、
兄が止めに入ってくれて、

首からひもが解けました。

もう一緒には暮らせない・・・。
ぼんやりと、そう思いました。

どんな理由での母の行動だったのかは
記憶にありません。

ただ、
母のもとから離れる、
大きなきっかけになりました。

それから数日して、
母の友人のおじさんが部屋にやってきて、

父の所へ行ってはどうか、

と持ち掛けてきました。

私と兄だけ。

持ち掛けてきた、
というより、
説得しに来た感じでした。

それから数日後には
手荷物のみもって、
そのおじさんに連れられ、

父のもとへ向かっていました。

ちなみに、
持たされなかった多くの荷物は、

すべて廃棄する、

と母から告げられました。

なので、
私は小学五年生以降の写真しか持っていません。

でも、この日を境に、
親の虐待に怯える、

地獄のような日々が終わりを告げました。

私の子ども時代は、ここまでです。

長くって&壮絶すぎて、すみません(笑)

私が、笑ってこう言えるようになったのは、

じつは、ここ数年です。

それまでは、

思い出だけで辛くって、

子ども時代の話をするだけで、涙をこぼしていました。

思い出すのも嫌なのに、

ふと、思い出してしまう。

それは、本当に苦しい事でした。

辛かった記憶をすべて吐き出し、

それをなんども読み返し、

たくさん泣いて、

それでやっと、笑いながら話せるまでになりました。

この【傷をいやすプロセス】については、
今まとめています。

また改めてお伝えしますので、お待ちくださいね。

※もし、あなたの心にも、
私と同じように、
辛くって苦しくって、今も痛む傷があるなら、
メールしてみてください。
チカラになれるかもしれません。※

このあとまた、
地獄の日々が再び訪れて、

支配される恐怖を再認識させられるんですが(笑)

それについては後日メールします。

恐怖におおわれた子ども時代が、
私に『支配されたくない』と、
強烈に刷り込みました。

支配されることの、

怖さ、

不安さ、

辛さ、苦しさ、悲しさ・・・

そんな気持ちを十分に体験したので、

もう二度と支配されなくなかったんです。

起業しなければ、

会社や旦那さんなどに経済的に依存することで、

子ども時代と同じように支配されてしまう。

あの恐怖の日々が、

また始まってしまう。

それは私にとって、
十分すぎるほどのWHYでした。

十分なWHY（理由。なぜ？）があれば、

HOW（方法、やり方）が見つかる。

わたしにとって、

理想の人生とは【支配されない人生】で、
それを叶えるための方法が、起業でした。

自分にとっての理想の人生と、
WHY（なぜ？）がわかれば、

そのためのHOW（方法）は、カンタンに見つかります。

あなたにとっての理想の人生って、
どんな人生ですか？

なんで、その人生が理想なんですか？
ぜひ、考えてみて下さいね。

もし、
あなたに最適のHOWが思いつかなかったら、
メールください♪

わたしも一緒に考えます。

ということで、
【支配されてると気付いた子ども時代レポート】は、
以上で終わりです。

最後までお読みくださり、
ありがとうございました！

支配されない人生を生きるための、

起業の内容については、

次回以降のメールでお送りしますので、お楽しみに！

依存したくない人のための、脱依存でハッピーになれる！メールマガジン

<http://nakamurahanako.com/lp/m/>

中村華子のブログ

<http://nakamurahanako.com/>